

古代奈良盆地の河川と溜池に関する 若干の歴史地理学の問題

藤 岡 謙 二 郎*

Some Historico-Geographical Problems on the Rivers and Irrigation Ponds in Ancient Nara Basin.

Kenjiro FUJIOKA

(昭和56年9月29日受理)

(1) 問題提起と既往の研究

奈良盆には多くの溜池があり、ふるくから掘さくされたというのが人々の常識になっている。しかし溜池の数は必ずしも全国一でなく、また渡来人の技術者も多かった古代において畿内のみ掘られたとも考えられない。近年竹内常行は、自らが昭和初期に行った全国の溜池調査の結果を集大成し、日本における稲作発展の基礎としての、つまり灌漑水利上に演じる溜池と揚水域の地域的分布や役割を概観している¹⁾。このことに刺激されて筆者は改めて農林省の全国溜池台帳集計(昭和30年)を府県別にみしてみた²⁾。次表に全国の計をかかげたが全国溜池の総数はじつに27万に及ぶことが知られるのである。その第10位までをあげると次のごとくなる。

このうち奈良県は第5位になり、且つ同じ寡雨地域の瀬戸内海でも兵庫県が第1位、これに対し対岸の香川県は第8位となることがわかり、必ずしも雨量との相関関係がないことが知られる。それよりも奈良盆地の場合は乾ばつと洪水が多く、溜池や河川が貯水又は遊水地的性格をもとどめていたことが知られる。

順位	都 道 府 県	総数(カッコ内は 5ha 以上のもの)	
1	兵 庫 県	42,980	(5,784)
2	島 根 県	17,897	(898)
3	山 口 県	16,761	(1,677)
4	広 島 県	16,031	(2,774)
5	奈 良 県	13,767	(1,632)
6	長 崎 県	13,567	(753)
7	新 潟 県	13,133	(1,258)
8	香 川 県	12,416	(932)
9	岩 手 県	10,616	(1,132)
10	岡 山 県	10,570	(2,856)
	全 国 計	277,025	(48,970)

つぎに大和国や河内国に溜池が多いという印象は奈良時代以前の記紀の記事が影響している。例えば「書紀」崇神の条をみると、“六十二年の秋七月”…“農は天下の大本なり、民の^{のみた}侍て生くる所。今河内の狭山の^{はに}埴田水少し。……其れ多に池溝を^ほ図りて、民の業を^{ひろ}寛めよ”…“冬十月、^{よさみ}依網池を造る”。…“十一月、^{かり}苜坂池、^{まがわり}反折池を作る。…”と河内及び大和の溜池が掘られている。しかし、この方も戦前に宝月圭吾⁹⁾による中世の荘園領主による灌漑支配の問題が取りあげられて以後、戦後になっては律令の古代以降におけるそれが歴史家の間に注目されることになった。ことに律令期になって土地開発が進むと用水労働の種類も増加することを龜田隆之¹⁰⁾は『続日本紀』や官符及び古文書から摘出している。その工事内容は前者の場合、遠江国荒玉河修築(天平宝字5)、河内国狭山池修造(同6)、同長瀬堤修造(同6)、河内国茨田、志紀、渋川等堤修築(宝亀1)、駿河国堤防修築(同10)等、また後者では越前国桑原庄開溝及修理(天平宝字)、越前国足羽郡道守庄(天平神護2)、佐保川堤修築(宝亀4)と畿内以外にも及び、さらに池だけでなく溝や堤防の修築があげられる。

これよりさき人工河川ともいべき大溝の改さくについても、大和国以外では有名な仁徳11年冬10月の“宮の北郊原を掘りて、南の水を引きて西の海に入る。因りてその水を^{なづ}號け掘て江と日ふ、又將に北の河の^{とみ}滂を防かむとして茨田堤を築く”。(『書紀』卷11)とあり、その他『書紀』卷22の推古15年の条には、“是歳の冬に、倭国に高市池、藤原池、肩岡池、菅原池作る。山背国に、大溝を栗隈に掘る。且河内国に戸苜池、依網池作る”。の記事があり、さきの崇神の時に出た依網池の名がここでも出てくる。その他同じ『書紀』の仁徳12年に有名な“冬十月に、大溝を山背の栗隈に掘りて田に^つ潤く。是を以て、其百姓、^{つな}毎に年豊”の記事があり、推古時代との関係が不明である。また仁徳14年には“猪甘津に橋^{わた}為す、即ち其処を号して小橋と日ふ。……又大溝を^{とむく}感玖に掘る。乃ち石河の水を引き…墾りて四萬余頃^{しん}の田を得たり”とある。この河内の大溝については、その後「古代を考える会」¹¹⁾で発掘が試みられている。

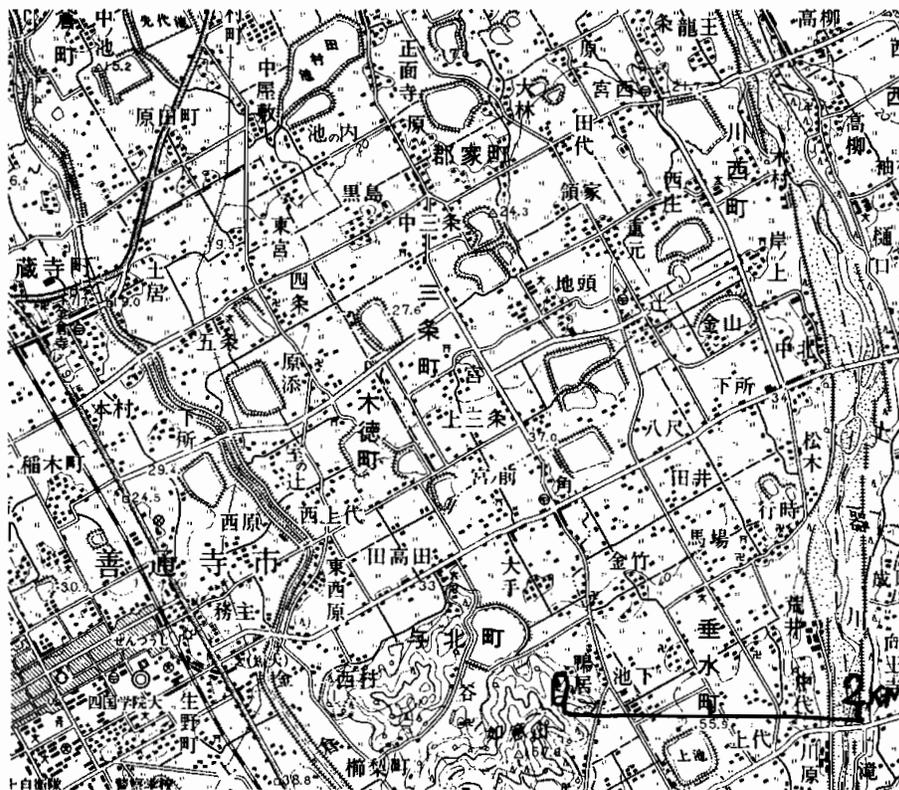
この応神、仁徳時代はいうまでもなく考古年代からすると古墳時代に当る。伊達宗泰¹²⁾は、奈良盆地の弥生遺跡や古墳群の立地と灌漑用水との関係を秋篠川氾濫原以下各河川流域毎に分類している。ことに周濠の前方後円墳以下古墳群の築造と上掲文献にみる池溝の築造といった労働が深い関係にあったことはいうまでもない。丸山竜平¹³⁾また河内国に例をとって“首長墓造営を契機とした地域開発と直轄地の設定……灌漑用水路の掘さくにともなう……2つの開発方式は古墳時代全般を通じての開発方式……”とし、開発地域における屯倉の成立を述べる。これよりのち班田制の実施とともに条里地割実施のためには灌漑用の溝渠畔の整備が必要となり、河川流路の分流が利用せられ、一部はその流路に変更をみるに至る。これら律令農民が朝夕耕した耕地の形態は所有者こそ異れ、つぎの荘園時代にまで引き継がれたことはいうまでもない。

さて再びもとにかえるが律令古代における池溝の開さくは平安時代に入ると、畿内から全国に及んだことは『延喜式』卷26の主税の項に「諸国出拳正税公摩雜稻」のことが記るされ、その中に国毎に池溝料として稻何束かがあげられている。まず五畿内からみると山城国3万束、大和国4万束、河内国2万束、和泉国2万束、摂津国3万束とある。ついで東海道についてみると伊賀国修理池溝料一万束、堰河防料一千束、伊勢国修理池溝料四万束、尾張国同三万束、參河国同三万束、遠江国同三万束、駿河国同三万束、伊豆国同一万束、相模国三万束、武蔵国同四万束、安房国同二万束、上総国同四万束、下総国同四万束、常陸国同四万束とある。これを東山道についてみても、さい果ての出羽国池溝料3万

東とあって、国の大中上下国を勘案しながら、ほぼ全国に出稲が割宛てられ、当時既に池溝が盛んに掘さくされていたことがわかる。

ところで問題は、しからば古代に掘さくされた溜池は現各府県の現存或は既に消滅したどの溜池にあたるのかといった溜池の実年代に関する歴史地理学的考証となると、殆んどなされていないのが現状である。このことについて筆者はかつて多賀城調査の折、その背後に今なお存在する加瀬沿が、当時この国府城の灌漑並びに上水道として使用されたのではないかと考えたことがあったが⁹⁾、残念ながらこの池の年代を語る文献がない。また『日本土木史』¹⁰⁾をみても、畿内では上掲河内の狭山池、大和の益田池（弘仁二年間）を除いては、古代の掘さくされたものとしては讃岐の満濃池（十市池）があげられているにすぎない。“大宝年間国守道守の創案せし讃岐最古の一大名池なり、古伝に上古清水の湧出する所水神を祀り、築池の際堤上に遷座す。……”とある。ところがこの讃岐平野の場合でも、文献にこそ出て来ないが、例えば地形図5万の散村の多い「丸亀図幅」をみると（第1図）まず普通寺市街が条里地割を踏襲しているほか、付近に「三条町」、四条、五条の条里地名があり、さらに西北方には「郡家町」や領家、地頭などの中家世地名も残存している。

つぎに溜池の形態をみると、奈良盆地のそれのように条里の正方形の坪をつぶしたと思われるものがない。この掘さく年代は果して何時なのかの疑問につきあたるのである。それとともに全国の溜池の形態を地形図で検すると、沖積平野にあるものと、山麓で堤防を



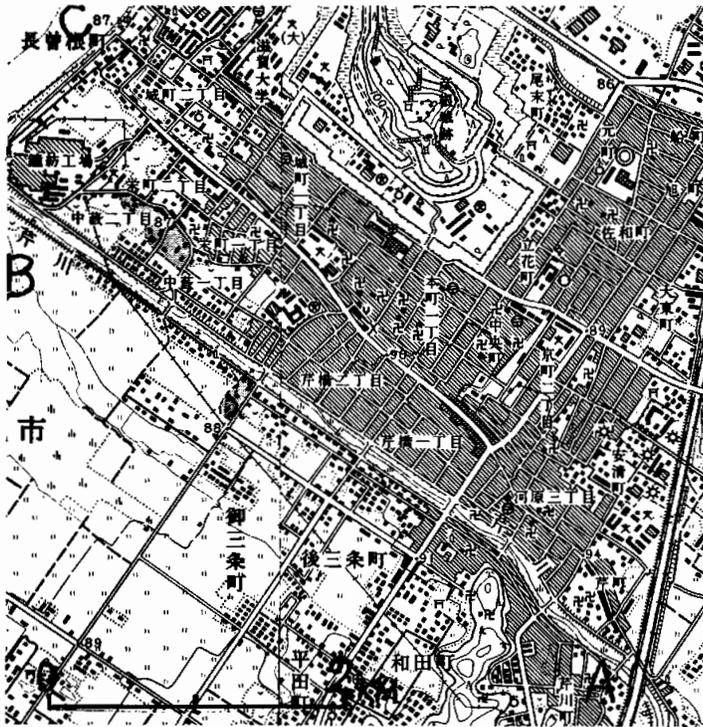
第1図 条里地割と溜池の卓越する丸亀平野

築いて湧水を堰きとめた、いわゆる谷池の存することを知るに至った。第1図の場合、与北町のその名も谷の溜池もそれである¹⁰⁾。

つぎに古代における河川の利用や人工によるその流路の改変の問題も同様に年代が不詳である。

このことについても筆者は、かつて内陸に位置する古代国府は外港を有し、河川が水運に使用れた¹¹⁾時にはその水を堰きとめ、川巾を広くして運河の役割をもつとめたこと等を灌漑による流路の人為的改変とともに推定したことがあった。例えばかつて周防国府城調査の折、現防府市域を流れる佐波川の分流たる迫戸川が、古代から掘られた運河で、河口港たる『延喜式』の勝間駅に通じたことを述べた¹²⁾。その他条里の畦畔に沿って灌漑用水を分水する場合、河川の分流を古代条里の計画線に沿って直角に改変する例はしばしばみられるし、また近世城下町の外濠がこれを踏襲することもある。第2図は近江彦根の旧城下町である。その外濠が条里の境界線を踏襲するほか、ABの芹川は現彦根市街地を区切るが、芹川はもとはACの方向を流れていたもの、少くもACは旧自然堤防で、これに沿って城下町を防御する寺院も集っている。この場合、もっと古く条里境界線（後三条町）として流路を変更させられたものと考えられる。

以上の問題提起を前提として、以下に奈良盆地に例をとって、これらの問題を具体的に考えてみよう。



第2図 彦根市街の条里地割と芹川

(2) 奈良盆地の溜池とその初現問題

奈良盆地の溜池が主として農業灌漑用水、時には洪水時の遊水池又は貯水池に使用され

たことはいうまでもない。この盆地の場合、俗に“大和の皿池”と呼ばれるその溜池灌漑は吉野川農業用水路完成前までは約70%を占め、残りが大和川水系¹⁹⁾の河川灌漑に依存していた。その数は大小併せて20,000に及んだといわれるが、現在では埋立てて、水田や宅地に化したものも少ない。ところが昭和28年3月に奈良県耕地課によって、山地の宇智、吉野両郡を除く奈良盆地の溜池台帳が出来た。これには名称、所在地、事業主体、工期⁴⁾、使用目的、受益面積、貯水量、型式等が記るされている。事業主体は水利組合が主であるが、中には高取藩等もある。

つぎに使用目的は用水補給とあり、型式は一方堤、二方堤、四方堤等がある。ところが問題の工期は明治5年等のほか、150年前とか寛永19年とか、時には高取藩等とあり、最も古いと思われるものはすべて“300年前と推定”とある。300年前といえば江戸時代のはじめの寛永の頃以前ということになる。何の根拠によったのか明らかではない点で資料価値が乏しいが、以下に市郡毎にその掘さく年代が300年前と推定される溜池の数と総数をあげてみよう。さらに名称のうち新池に対する古池、大池、三条池、荘池、その他古文献に出てきて現存するものの名称をあげてみるとつぎのごとくなる。

市 郡 名	数	総数	参 考 名 称
奈 良 市	63	114	市之井、古池(2)、三条池、佐紀池、上鍋池、小鍋池、水上池、四条池、大池(4)、庄田池
大和高田市	8	21	古池(3)、大池(2)、一大池
添 上 郡	44	132	古(旧)池(4)、大池(3)、広大寺池、往古池
山 辺 郡	83	180	古池(5)、大池(2)、六条池、七坪池、田井庄池、九条池
生 駒 郡	183	311	古池(8)、大池(4)、大反田池、蛙股池
磯 城 郡	39	146	古池(8)、景行御陵、崇神陵、八条池、九品寺池、九ノ坪池、大安寺池、雲古池、鎌池、二町池
宇 陀 郡	13	40	大池(2)
高 市 郡	30	82	古池(3)、大池、和田池、石川池、四条西池、四条東池、四条堀池、松前池、御園池
北 葛 城 郡	67	229	大池(5)、古池(7)、唐古池、尺土池、郡ヶ池、出屋敷池、南郷池、旗尾池
南 葛 城 郡	46	126	古池(2)、大池(5)、忍海池、神丈池

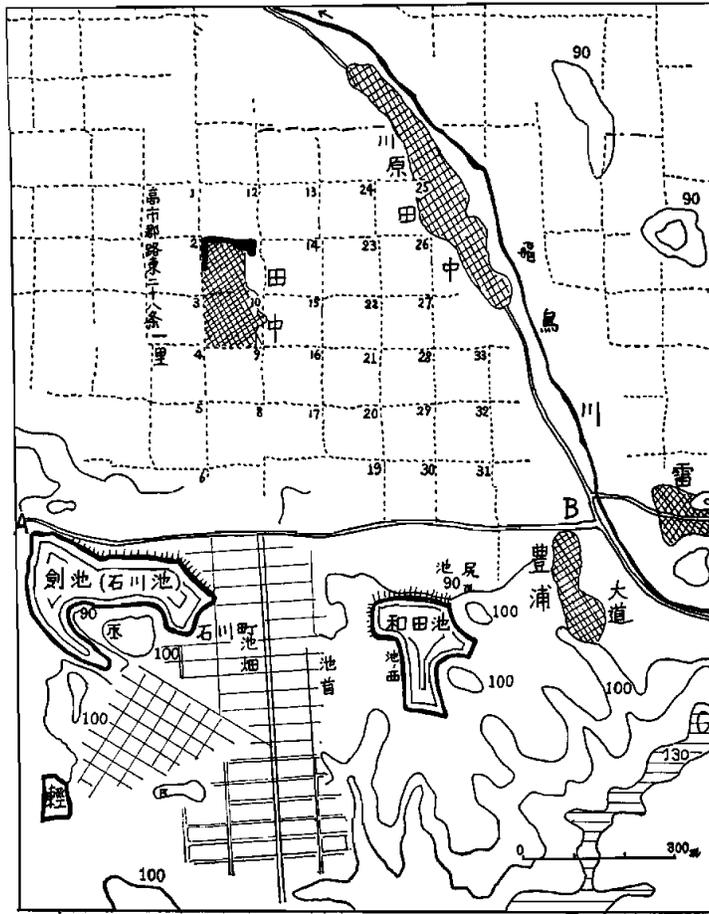
まず工期に関しては明治、大正等新しいものは年数が書かれているが、それ以外は300年前、200年、100年とランクがつけられ、それ以前では例えば参考名称らんで下線が施し

たものなどは500年前推定等とある。おそらく水利組合等で村の伝承をもとに分類したのであろう。これによると約半数以上が近世及び以前の掘さくになると見做してよい。また参考地名についても古池は新池や今池、大正池等に較べると古いことはわかる。一方、古池とはほぼ同じ位の数がある大池についても、これが何時代のものかの絶対年代は不明である。また六条池や七坪池等条里関係の名称も、これらの名称がつけられて以後に掘さくされたことがわかる。また景神、景行陵など前方後円墳の周濠の水が、その後灌漑川水に使用されたか、これがまた古墳築造時と同様であったのか否かは不明である。また奈良市の上鍋、小鍋両池も同様な周濠を池とみなして使用したのであろう。その西の水上池は、現在もその名称で呼ばれているが、じつは記紀にはなく、『大日本地名辞典』によると『古事記』の多他那美、前皇廟陵記の栢列池とする。しかし平城京の北辺にあることから多賀城の場合と同様な、この頃に掘られた池と考えてよい。なお添上郡の廣大寺池や大安寺池の名は出るが、高市郡には当然のことながら弘仁13年に掘られた益田池の名がみえない。これは現存しないためであるが、同郡の和田池や石川池のどちらが『古事記』の劔池なのか、文献に出る軽池が果して現存の小型の軽池なのかとなると、これまたげんかくな比定はむづかしい。また渡米人名を想わす唐古池は磯城郡にも北葛城郡にも存在するが、磯城郡の場合、かの弥生期の大村落遺跡は池の底から発掘されたことから、この池が掘られた時、すでにここに村落が存在しなかったことになり、この掘さく年代が問題になる。

筆者は以前、歴史地理学的な立場から現存の奈良盆地の溜池について、その形態や地形的位置などについて、それが 1. 方格の条里又は条坊地割に規定されるもの 2. 古文獻に出る溜池が案外山麓の堰止池すなわち谷池に多いこと 3. 馬見丘陵地等に分布する小形の溜池が近世以降に掘さくされたものが多いこと等を指摘するところがあった¹⁰⁾。ところがその後本年になって、かねて榎原考古学研究所員が試みて来た奈良盆地のふるい地籍図の復刻と、これに伴う秋山日出雄等による推定条里地割の復原が試みられ、その書物が出版されることになった¹¹⁾。そこでこの事業にも関連した筆者は、前回時に使用の原図¹²⁾や在来の仮製図や $\frac{1}{25000}$ 図よりも、さらに価値あるこの大縮尺図たる $\frac{1}{5000}$ 図について再吟味し、且つは上掲奈良盆地の溜池調査帳にみる「古池」等について改めて、その地形的位置などをも検討することにした。以下にこれらから得た若干の結果についての既往の考え方に再問題提起し、今後とも溜池の絶対年代推定は他の名もなき道路や次項で述べる河川のそれと同様、極めて困難であることにふれたい。

まず第3図は旧平城京南端の条坊と、その南の添上郡の京南条里地割、この間に残存する溜池の分布を示したものである。同図A Bは平城京左京南端の九条大路に当る。佐保川より東で同図北端のC Dたる岩井川は八条を境して東西流し、この佐保川に注ぐ。この間「トロ池」、**「西九条池」**、及びその西隣池が40丈(1m25前後)4方の条坊地割に規定されるのに対して、西北の**「河原池」**及び**「ホツミ池」**は条坊に無関係である。ということは条坊以前に掘られたのか、以後条坊制が意義を失ってからか、いずれかだと考えられる。つぎに添上郡の京南条里は坪並が必ずしも一致しないが、**「法間田池」**は条里地割に関係深く、36丈(109m)4方で、条坊地割よりもやや小型である。ところが**「ホツミ池」**もほぼ同じで、平城京城には、当時以前に掘られた条里型の溜池も存在していたことが知られる。

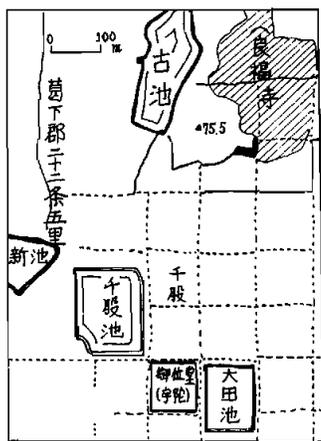
また条坊型の「トロ池」についていっても、平城京設立後、条里型溜池を40丈4方に拡大したとも考えられるのである。第3図は以上の諸点について問題を提起する。その他、東九条集落と「ホツミ池」、同西九条集落と「西九条池」との関係に関し、現存両集落と



第4図 飛鳥の軽及び剣池と古道

もあると仮定した場合、第4図の3池は地形的に類似しており、低い洪積段丘の段丘崖を堰きとめていることや、この奈良盆地の場合、大阪層群の粘土層の不透水の湧水を利用した谷池であることが知られる。ついでながら同図のABは推定藤原京域の南端大路にあたり、『日本霊異記』に雄略朝に“阿部の山田の前の道と豊浦寺の前の路とより走せ往く、軽の諸越の衢にに至りさげび……”の軽の路である。軽市が古代大和の三市の1つであり、高取川水運と下ツ道、この軽路の交叉点にあたる商業都市であったことはいうまでもない¹⁸⁾。なお、ほかにも同図で明かなことは藤原京域が条坊地割でなく条里地割であることは数字で示した方1町の坪並が畦畔とともに残存することと、今も一部に環濠集落の形態をとどめる田中部落は稗田その他と形態の類似する中世の特徴の顕著なものであり、飛鳥川べりの川原田中はその出村と思わせることである。現地でのヒヤリングによると、川原田中はもとより、田中集落もしばしば洪水の被害をうけたという。或は奈良盆地の環濠は村落自衛の目的のほか遊水池や灌漑用の性格をも兼ね具えたものと考えられる。

つぎに第5図は、第4図の北方の天香久山付近の地籍図から重要部分を摘出したものである。まず「古池」が地形的位置からすると、上述の堰止の谷池であり、小字「池」が示すように、さらに大規模な磐余池を後に「古池」と称したものと考えられる。「書紀」神



第6図 大和高山市域の溜池

第7図 5万分1図にみる馬見丘陵
付近の溜池分布

また近年この溜池台帳から溜池の築造年代を問題にし、室町以前を5.2%、徳川期82.9%、明治8.3%、大正・昭和3.6%としている²¹⁾が、この統計資料そのものが問題であることはすでにふれたところである。

(3) 古代の河川と運河の問題

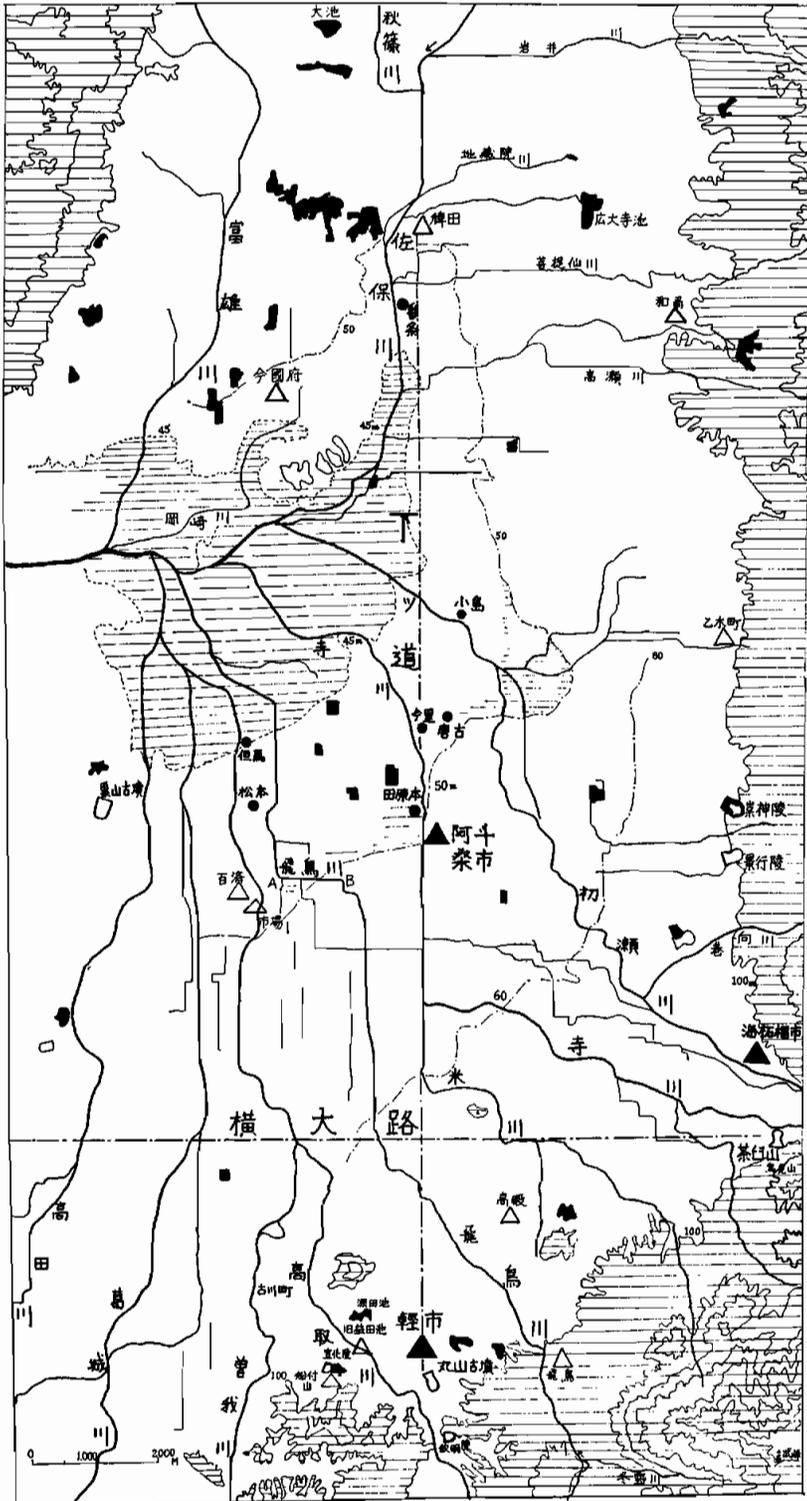
古代の河川が灌漑に使用されたことはいうまでもないが、一方、河川はまた水運に利用され、人工による流路変更や運河の掘きくともなったし、洪水毎に流路を変更したり、上流からの土砂の運搬、堆積によって、水深が浅くなったり、時には濁川となってその機能をなくしたものもある。この場合、残存する自然堤防によって1日流路を見出すのは容易であるが、その絶対年代を推定し、古文献のそれと現在のそれを対比させることや、水運の方法がどの程度であったかを推定するのは容易ではない。まず古く「書紀」の履中4年に見た“石上溝”からみてみよう。この記事は同じ『書紀』の斉明2年に“天皇、乃ち遷る。號けて後飛鳥岡本宮と曰ふ。田身嶺に、冠らしむるに用れる垣を以てす。復嶺の上に……観を起つ。號けて兩槻宮。時に興事を好む。……水工をして渠穿らしむ。香山の西より石上山に至る。舟二百隻を以て、石上山の石を載み、流の順に控引き、宮の東の山に石を累ね垣とす。時の人謗り曰「狂心の渠。功夫費捐三万餘。垣造る功夫費捐七万餘……”と同一のものと思われる。結局完成しなかったわけであるが、履中時のものの拡張とみても、その場所が問題になる。田身嶺を多武峯、石上山を三輪山とした場合、天香久山西の川までどうして水運を利用したのか、また舟二百隻とはあまりにも誇ちようである。しかし天香久山の西には、たしかに溝または運河が掘られたのである。それは第5図のPQ点がほぼ南北流し、米川に注ぐことであり、しかもP点付近に「堀川」なる小字名が残存することである。

おそらく、この川は藤原京の東堀川にあたるものと思われる。すなわち藤原京時代に、もともと存在、或は計画されていた石上溝を改修したものとするべきであろう。ここで筆者は『万葉集』巻1にみる“藤原宮の役民の作る歌”を想起する。近江国の田上山の材木は

宇治川、木津川經由、奈良盆地に入っては、佐保川、初瀬川から飛鳥川ではなく、寺川に出で、その南の米川からこの堀川を經由したものと考える。しかるにこの「狂心の渠」について秋山日出男は寺川だとする²³⁾。しかし米川ではなくて寺川の南北の直線道路は現実において天香久山の西を通らないのである。

つぎに大和の3市、すなわちさきの軽市、海拓^{うぼ}榴市と、もう1つ阿斗桑市の位置についてみよう。ことにこの最後者について「書紀」敏達12年には“館を阿斗桑市に営りて、日羅^{にほ}を住らしめて、^{わが}欲の隨に供給”とあり、ついで推古18年にも“冬十月……新羅、任那の使人、京に臻る。……即ち阿斗の河辺の館に安置る”とある。この位置について『大和志』は田原本町の坂手集落をあてている。河辺の川とはいうまでもなく下ツ道に沿って北南流する寺川のことであって、当時渡来人が難波から大和川を溯って来たことを物語る。なお寺川といえば筆者は田原本町に近い唐古遺跡発掘の折、ここから船を画いたへら書きの弥生土器が出土したことを思い出す²³⁾。これは大和川が大和川平野に出る谷口にあたる高井田の横穴式古墳の壁画等とともに先史、古墳時代における大和川水運の事実を遺跡遺物が物語る貴重な資料である。一方、海拓榴市についてもその記事は「書紀」の武烈即位紀や敏達14年にあり、さらに推古16年(608)に“秋8月、唐の客、京に入る。是の日に、^{かざりうま}飾騎七十五匹を遣して唐の客を海石榴市の^{ちまた}術に迎ふ”。とある。この位置をすでに拙文¹⁸⁾で考証したように現在の三輪の金屋だとすると、ここは初瀬川と東西の横大路—推古21年“又難波より京に至るまで大道を置く”とあるから、これより以前であるが、この推古の記事は、同じ「書紀」仁徳14年の条に“是歳、大道を京の中に作る”と同じのちの竹内街道を整備したものであると筆者は考えている。——とが交叉する点にあたる。また推古時代の京は、この付近に存したものであると思われる。一方、海拓榴市の^{ちまた}術の文字は同じ「書紀」の武烈の条には“海拓榴市の^{ちまた}巷”とあり、敏達の条では“海石榴の^{うまのち}亭”の字が書かれている。巷とは文字の如く河港の意味であるから、この初瀬川の谷口扇状地の裾にまで、当時唐船が溯って来たものと考えねばならない。

一般に古代の奈良盆地では、青垣山の1つたる地塁山地の大和高原には今日以上に森林が被ふくされ、伐採もなく、この基盤岩をなす古生層間の領家花崗岩の土壌浸食も進まず、ために今日見るような各河川の天井川形成と、それに伴う河床の上昇もすくなく、且つ水量も豊富だったものと考えられる。従って大和川上支流における河川の通船溯航地点も第8図の●印で示したように、近代までは初瀬川では嘉幡、小島、寺川では今里、田原本、曾我川では但馬、飛鳥川では松本、佐保川では番條まで一つまり同図45~50mの等高線間—と考えられた²¹⁾のと異って、古代ではさらに上流にまで舟の溯航が可能だったものと考えられる。かくて筆者はまた軽市についていっても、ここが下ツ道—筆者はまた以前にこの奈良盆地南北の幹線計画道路の設置を丸山古墳と関係ある古墳時代だと推定した¹⁵⁾—と高取川(檜隈川)舟運の溯港点だと考えた¹⁸⁾のである。ところがこの流路の久米寺南方側では平安期の弘仁13年(822)に益田池が掘られ、現在その碑文が残っている²⁴⁾。この池は高取川上流からの水を堰き止め、他の池溝と同様、この時代の干ばつに備えて付近の灌漑用の溜池としたものであるから、普通には当時はすでに古代の高取川水運はその機能を失くしたものと考えねばなるまい。しかしそれでもなお、筆者はこの池のあたりまで船が来たのではないかと思われる事は付近の宣化天皇陵付近の山に「船付山」なる名称の存することである。また別の解釈を試みるならば、この益田池は灌漑のほか、貯水池の機能を持ち、曾我川に合流するまでの高取川水運を助けたとも考えうるのである。(第8図参照)



第8図 奈良盆地の河川と舟運の溯航点及び古代地名

その他、この西の曾我川についても、さらにその西の葛城川についても古代の水運に関係が深いことは、葛城川の場合、その上支流の水越川の吐田郷からは多鈕細文鏡と銅鐸が発見され、これが生駒山地西麓の恩智からも出土、これらが大和川水運に関係の深いこと²⁵⁾や、京都の鴨川の上流に鎮座する賀茂社の祭神が『風土記』逸文の山城国の条で“大倭の葛木山の峯に宿りまし、彼より漸に遷りて山代国岡田の賀茂に至り、山代河の随に下り、葛野河と賀茂河の会す所に至り……”の記事を筆者はこの葛城川水運を利用したものと考えている。ここで山代河とは木津川のことである。このほか、盆地の北部から南流して初瀬川に合流する佐保川についても、田上山の良材の運搬だけでなく、舟運にも役立ったことは、筆者が以前にもふれた『万葉集』の和銅3年の藤原京より寧楽宮に遷る時の歌の…“泊瀬の川に舟浮けてわが行く川の……奈良の都の佐保川にい行き至りて……”の文句から知られる¹⁹⁾¹⁵⁾。ところでこの舟の出発点は藤原京でなく、藤原京の場合は寺川が利用されたものと考えた。筆者はすでに田上山の良材が運こばれたのは寺川だと推定したが、飛鳥川の場合、第8図のABで示した直角の箇所が条里時代とすれば問題であり、舟運には適さないことになるのである。

この飛鳥川については、また秋山日出雄の論文²⁶⁾が参考になる。秋山は『日本紀略』天長3年(826)にある“掘加勢山溝、飛鳥堰溝、”を問題にし、“口分田の班給が弘仁元年の班賜後、19年間実施されず、漸く天長3年11月と天長4年正月に畿内校田使が、翌5年正月畿内班田使が任命された……”とし、弘仁以後上掲益田池や飛鳥川の開さくが多いことに注意した。また東大寺蔵の「飛驒庁絵図」からその流路がほぼ現在の如くであることや、『平安遺文』には飛鳥、藤原地域に7つの堰の記さいがあること、等を指摘し、“飛鳥川の河川の中心が条里制の坪の境界線になる”こと等をのべるが、この飛鳥堰溝が、現地地形図の何処にあたるかを指摘していないし、この論文の中では水運のことにふれていない。従ってこの堰溝とは灌漑又は排水のための溝で、舟運の運河ではないと思われる。氏はまた橋寺と川原寺間の伝板葺宮付近を南北走する昭和52年度の榎原考古学研究所発掘の2m巾の石溝²⁷⁾についても、それが5～7世紀の築造になることを注目しているが、これもまた同様な性格をもつものとする。

要するに飛鳥川の場合も、すでに第1項でみたように条里時代の溝渠による河川流路の人為的変更以後、流路にさほどの変化がないとすれば、いかに堰をつくり、乱流をさけるための石溝を作っても、上掲中流のABのごとき直角の個所の存する水路では舟運に使用出来ないことになる。しかし、奈良盆地のような洪水と干ばつの多い水量に変化のある河川において、堰や運河を利用し、干ばつや洪水時に具えることは灌漑用のためではなく、船運用にも古来から用いられたことも考えられる。

最後に運河についてふれるならば、河川の人工的改変にあたり、直線的な条里地割に従いながらもその河川を拡張し、深さを大きくし、これを運河とせんとしたことは、さきの藤原京の東堀川や下ツ道に沿う寺川や米川、その他平城京の両堀川ともいべき佐保、秋篠両川の場合についても考えられるし、一般曲流河川についても、堰と堰間に湛水すれば、運河としての役割を果しうるのであって、その程度が問題である。ところが近年榎原考古学研究所による番条町あたりの下ツ道の調査から“下ツ道は路肩幅16mで西側には幅約4mと推定される側溝があり、東側には幅11mの堀川—仮称「下ツ道堀川」—が併行している”との中間報告²⁸⁾文を手にした。わずか2ページのパンフレットであるが、さらに“「下ツ道堀川」は計画的に掘られた重要な運河であった”。としている。筆者もまたこれを信じ、さらにその南限が上掲盆地南部寺川につづくか否かを将来発掘によって証明され

ることを期待する。また報告者はほかに、平城京の東京極に沿って、平城京の東南隅から西南流する稗田堀川をも考えているが、これが運河であったのか、排水溝であったかは将来の問題として、ともかく奈良盆地の中央部を南北に貫くY軸ともいべき下ツ道こそ、x軸にあたる東西の盆地の古代都市計画上の主要な座標の主軸を形成し、下ツ道の側溝が奈良時代の灌漑渠溝を継承し、運河として拡張整備されたものとする。

む す び

第8図は2万5千分1の近年発行された多色刷の土地利用図にさまざまな歴史地理的事象の記入を行ったものである。ただし溜池については比較的大形のもののみを記入した。ところが、この中には近年拡大された例えば大和郡山市の大規模な養魚池や橿本町東方の断層崖下の白川溜池等、明治の仮製地形図や従来の2万5千分1図には存在していた溜池とは必ずしも一致しないものも存するし、同一縮尺でありながら、これらふり地形図に存在する溜池で、土地利用図には畑地や水田に転じているものもある。これは吉野川水路導入後の変化である。にもかかわらず今なお条里地割や条坊地割に規定された方格の皿池や、直角流路をとる人工改変河川や水路等があちこちに見られる。

同じ水資源でありながら溜池は、灌漑或は貯水を目的としたのに対して、歴史時代の河川は灌漑のほかに水運にも利用され、その一部は運河としても利用された。

ところが(1)で論じたこれら無数の溜池や(2)で論じた実年代を推定分類することは、名もなき同様な道路設置の実年代を推定するのと同様、極めて困難であり、時には相対年代すら不明な場合が多い。しかしながら、わずかな古文書と、発掘の事実、現地での微地形的調査、小字名や地籍図等による景観の復原等、歴史地理学的操作を試みることによって、わずかながらの先史時代以来の奈良盆地の歴史的景観が具体的に復原されようとしているのである。奈良盆地は日本の歴史的風土の縮図であるといつてよく、将来とも歴史地理学の立場から、この人為的景観だけではなく、自然的環境の復原保全²⁹⁾にも努力したいことを述べむすびとする。(1981. 9月末)

〔付記〕 本文は1981年4月に奈良大学で行われた歴史地理学会の大会で特別発表した内容に、その後出版された榎原考古学研究所編の『大和国条里復原図』を参考に、新資料を加えて書き直したものであって、戦後における筆者の奈良盆地研究の貧しいモノグラフである。

注

1. 竹内常行：『日本の稲作発展の基盤—溜池と揚水機—』昭和155。
2. 統計の資料の蒐集と当日学会で展示した分布図の作成は奈良大地理学科卒業生の上田明君の援助による。さらに昭和45年現在、溜池をなお農業水源とする日本の農業集落の総数は21,143となる。(農林省統計調査部『1970年世界農林業センサス』(昭和46)参照)。
3. 宝月圭吾：『中世灌漑史の研究』昭和118。
4. 亀田隆之：『日本古代用水史の研究』昭和48。
5. 古代を考える会『河内古市大溝の検討』(1977)。
6. 伊達宗泰：遺跡分布よりみた古代地域の考察『近畿文化論攷』昭和37其他。
7. 丸山竜平：河内の開発における二つの画期—溝渠の築造と渠、屯倉の成立をめぐって—(『日本史論叢』5) 1975。
8. 藤岡謙二郎：さい果ての陸奥国府兼鎮守府と多賀城(「古代都市域と現在を考える」—「地域」第8号)(1981)。

9. 日本土木学会編：『明治以前日本土木史』昭和11.
10. 濃岐平野の条里復原図は高重進氏によって成されているが、溜池の問題はなく、将来筆者自身も現地調査を行うつもりである。
11. 藤岡謙二郎：『国府』昭和44, p.56.
12. 藤岡謙二郎, 小野忠烈, 足利勉亮, 桑原公徳：周防国府城の歴史地理学的調査（防府市教育委員会『周防の国衙』昭和42. 所収）。
13. 藤岡謙二郎：『大和川』昭和47.
14. 同台帳のコピーは当時京大教養部人文地理学教室の助手だった金田章裕氏をわずらわし入手することが出来た。
15. 藤岡謙二郎：律令的古代における宮都及び地域中心の景観変遷史的研究（同『景観変遷の歴史地理学的研究』所収）昭和53. 同：『地理学と歴史的景観』昭和52. 同：『畿内歴史地理研究』1958.
16. 橿原考古学研究所編：『大和国条里復原図』昭和53.
17. 当時の資料は奈良市『平城京朱雀大路発掘調査報告』付図（昭和49）による。
18. 藤岡謙二郎：『古代三市とその交通地理的位置』（『橿原考古学研究所論集』第五）昭和54.
19. 『大和馬見町史』昭和30.
20. 金田章裕：平安期の大和盆地における条里地割内部の土地利用（『史林』61の3）昭和53.
21. 松浦茂樹：『大和平野における開墾と治水』昭和51.
22. 秋山日出雄：条里制地割の施行起源（橿原考古学研究所編『日本古文化論叢』昭和45. 所収）。
23. 末永雅雄, 小林行雄, 藤岡謙二郎：『大和唐古弥生式遺跡の研究』（京都帝国大学文学部考古学研究報告）昭和18.
24. 末永雅雄：『池の文化』昭和47.
25. 岩根保重, 藤岡謙二郎：『生駒山脈—その地理と歴史を語る—』昭和19.
26. 秋山日出雄：大和「飛鳥川」の歴史地理学的研究（藤岡先生退官記念事業会編『歴史地理研究と都市研究(上)』昭和53所収）。
27. 橿原考古学研究所編：『飛鳥京跡二』（『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第40冊』）昭和55.
28. 中井一夫, 泉武：「大和郡山市稗田下ツ道発掘調査概要」1980.
29. 藤岡謙二郎：飛鳥の歴史的風土（『地理』24の3）1979.

Summary

The Nara Basin which is inner fault basin surrounded by tilted brooks was cradle land of ancient Japanese state. In the southern part of this basin in 694 ancient palace city so called Fujiwara Kyo—the relics excavated once on the part of modern Kashiwara City of Nara Pref.— and Heijōkyō—the part of modern Nara City— was built in 710 A. D. The arable land of this ancient time was divided square of 109m or 125m by so called Jōri or Jobō System. These historical landmark survived even now in this basin.

I tried in this papers with 8 Figures about the origins and chronological data of numerable irrigation ponds and artificial rivers of this basin from the point of view of historical geography.

(1) There are 4 type irrigation ponds in Nara Basin. 1. so called valley pond which was banked the ground water of mountain foot. Some of ponds of this type is coincide with the ancient documents such as “Nihonshoki”. 2. square or rectangular ponds which regulated by ancient Jōri or Jobō system. 3. many small

ponds in hill or low land which was dug in modern age. 4. many other ponds which cannot distinguish their chronological data.

(2) There are many rivers in Nara basin. They not only were served irrigation in historical age as well as ponds, but also served navigation from ancient time. We can find also even canal in ancient documents. Now we find many artificial streams for irrigation here and their in Nara basin. Especially some of right-angled rivers testify that their streams regulated by ancient Jōri system as ponds. In generally ancient river ports can find in the upper reaches of this basin compare with modern age ports. For example the famous market town "Tsubanoichi" which built ab. the end of 5th centuries situated at the foot of alluvial fan of upper stream of Yamato River. This caused the upraised river floor by deposition of sands from Yamato plateau followed by advance of time. At the origin of artificial canal I discussed about the artificial river of Tera which run from south to north in the heart of Nara basin.